



森本和嘉子さん

「険しき山路の白百合は 雨にも風にも耐えて咲く 気高く清らかな花の如 憂き世の波に生き抜かん」。これは私が幼い頃、戦争未亡人として働きつめだった母が私を背負いながら、いつも口ずさんでいた思い出の歌です。

母は「これは父ちゃんが戦死して残された未亡人会の歌。家を守り、家族を養う為に苦労した時代、皆で励ましあつて歌ったんだよ」と話してくれました。若くして大黒柱を亡くし、苦勞に次ぐ苦勞を重ね、心が折れそうな時の応援歌だったそうです。今では「戦争未亡人」は死語となり、この歌を歌える方が居られるかわかりません。

昭和十八年四月、「柔らかないな、温

伝えたい

戦後80年へ過去から未来

伝えたい記憶と言葉

森本和嘉子さん

81

茅野市塚原

未亡人会の歌



「かよい」と軍服姿の父がお宮参りの私を大事そうに抱いて何度もそつと頬すりし、なかなか離さなかつた。母からも何百回も聞いた亡き父との唯一のエピソードです。父はそのまま出征し一年後白木の箱で無言の帰宅をしました。やがて私も親となり、若くして

未来を断たれ、老父母や妻子を残して逝くのは、どれほど無念だったか、実家の仏壇の軍服姿の父に手を合わせるたびに、父への思いが胸に込み上げます。

十年前に厚生省の計らいで父が戦死した東部ニューギニア(現パプアニューギニア)へ慰霊参拝に行きました。マリエンベルグという町のセピック川のほとりに眺えた祭壇の前で父への手紙を読み上げ同行の方々

と泣きながら「ふるさと」を歌いました。そして日本から持参した塔婆やお酒、お菓子などを水に浮かべた時、父が傍にいる気がして思わず「お父さんお

↑

戦没者慰霊にパプアニューギニアを訪れた際、祭壇前で父への手紙を読み上げる森本さん(2008年2月)

今年の8月15日で戦後80年を迎えます。引き続き戦争の体験談を募集します。内容は戦争体験に限らず、戦後の生活に関する話題などでも結構です。原稿用紙2枚(800字)程度にまとめ、住所、氏名、年齢、連絡先(電話番号と、必要に応じメールアドレス)を添えて寄せてください。掲載時期は随時調整します。写真や資料も歓迎しますが、お返しはできませんのでご注意ください。写真や資料の説明文も付けていただけると助かります。差し支えなければ、掲載用の顔写真(イラストでも可)の提供もお願いします。匿名、ペンネームも可能ですが、応募は本名でお願いします。

〒392-8611 諏訪市高島3-1323-1 長野日報社編集局
「戦後80年企画」係
hodo@nagano-np.co.jp
問い合わせは本社編集局(電話0266・58・2000)へ。

迎える来たよ、一緒に日本へ帰ろうね」と人目も憚らず大声で呼びかけていました。

亡き父の若き日の魂を胸に抱いて帰国し実家のお墓へ報告を済ませ、漸く長かった「私の戦後」に一区切りつけることができました。子の為、家の為と全てを犠牲にし、苦難の人生を歩んだ母を偲ぶ時今でも「未亡人会の歌」をそつと口ずさみます。もう二度と戦争の悲劇を繰り返さないよう、永久の平和を祈りつつ。

※原文を尊重して掲載しました。